

ゆくり はきりべをこめて  Megumi

「ぼくの大切なおはあちゃん」

栃木市立藤岡小学校

五年 須藤 星成 男

「もう、このまま死んじゃいたい。この言葉を聞いたとき、ぼくの心は、ずきずきと痛みました。」

ぼくの家族は六人です。ぼくの祖母は、パン屋さんを営んでいました。お店には、地域のお客さんがよく買いに来てくれて、いつもにこにこした笑顔でパンを売っていました。

ぼくも祖母が作るパンが大好きでした。

しかし、ある日突然、足が動かなくなってしまう。たのです。それは、三十年間ずっと、立ち仕事をしていたからだといいのです。そのとき、祖母はすごく気持ちが沈んでしまっている。ぼくは、孫であるぼくに向かって

「もう、このまま死んじゃいたい。」と泣きそうな小さな声で言いました。目の前にいたぼくも、泣きそうになるのをこらえる事が精一杯で、何も言えませんでした。

その夜、ぼくは布団にもぐり込み、その日の出来事を思い出して泣いてしまいました。あんなにパン屋さんが似合っていた祖母。大好きなお店がもうできないのは、相当ショックなことには違いない。そして、祖母は、歩けるようになるのかと。ぼくは、しばらく布団の中でいろいろなことを思い、この考えにたどり着きました。

「ぼくに出来ることは、何だろうか。」
それから祖母は、約四ヶ月入院しました。

今は退院して以前よりは、すごく元気になりました。けれども足は、まだ少ししか動きません。そこで、ぼくが提案したのは、今まで祖母が一人でやっていた事を家族で分担しようというものです。今は、それを実際に挑戦し続けているところでは、

ぼくは、祖母をトイレに連れて行きます。自分で歩きたいときは、転ばないように後ろから支えます。たまに料理も作って運ぶなど、祖母が自由に動けない分、ぼくが手足になり

進んで手伝うように心がけています。いつも
 何かしてあげたときには必ず
 「ありがとう」
 と言ってもらえます。言われると、とても嬉
 しくて、ぼくもつい
 「ありがとう」
 と言ってしまう。ありがとうは、お互い
 を幸せにする言葉だと実感する瞬間です。
 ぼくは、一生けん命手伝うことは、祖母に
 対する小さな親切だと考えます。それは、祖
 母に限らず、学校の友達や先生、時には、見
 知らぬ相手にも言えることだと思えます。祖
 母からもらった
 「ありがとう」や
 「助かったよ」などの温かな言葉がその事に
 気づかせてくれました。祖母が歩けるように
 なる日が来ることを願ひ、これからも精一杯
 手伝います。そして、もう二度と
 「死にたい」
 なんていう言葉は言わせません。